

## 姜徳相氏に聞く —布施辰治宅訪問のことを中心に—

川口 祥子

はじめに

姜徳相氏 略歴

- ①お父上のことなど
- ②布施辰治との出会い
- ③弟・姜徳勲氏（故人）のこと
- ④戦後の日本との中で生きて来て思うこと
- ⑤朝鮮戦争の時、民戦などの活動をしたか、という問い  
に対して
- ⑥山辺健太郎氏との出会い
- ⑦私の先生と言える人  
むすびに代えて

キーワード：姜徳相、布施辰治、  
東京朝鮮中高級学校事件

はじめに

筆者は布施辰治の数多い事績のなかでも朝鮮人との関わりについて関心をもって調べている。2012年に高麗博物館の樋口雄一館長にお会いした折、姜徳相氏が生前の布施辰治をご存じなので話をお聞きしておいてはとのご示唆をいただき、2014年9月16日、在日韓人歴史資料館にて館長の姜徳相氏のお話を伺う機会を得た。

すでに姜徳相氏からの聞き取りをまとめたものとしては、吉見義明・川田文子「姜徳相氏からの聞き取り—ある在日朝鮮人の戦中体験と戦後体験—」中央大学商学研究会『商学論纂』第54巻（2012.12.5）、55巻（2013.10.30）（ともに第12号合併号）がある。吉見氏には「占領期の日本人の“平和と民主主義”を目指す動きを考える上で、同じ時期に暮らしていた在日朝鮮人にとって、この“平和と民主主義”がどのように見え、

どのような意味をもっていたか」を考えるとという課題があり、川田氏はこれまでも「在日コリアンの個人史、戦中・戦後」をインタビューしておられる（対象は主に女性であるが）。そのお二人が質問をして姜徳相氏がそれに答える形で、54巻は戦前、55巻は戦後の氏の個人史が語られている。それは赤裸々に語られた個人の歴史ではあるが、歴史学者としての目を通して客観視し歴史的に位置付けられており、とても興味深く貴重な記録といえる。

ただ、その中で布施辰治に関しては一か所で触れられてはいるものの、詳細には語られていない。それ故今回お聞きした内容を記録に残しておくことは前出の聞き書きを補う意味にもなるのではないと思われる。また前出のものと同重なる部分もあるが、日本人に対する貴重なご批判でもあるのでそのままほぼ全部を残しておきたいと考えた。

記述は一問一答式ではなく、質問に対して答えていただいた内容を筆者が適宜まとめ、それに修正・加筆していただいた形になっている。

姜徳相氏 略歴

- 1932.2.15 慶尚南道咸陽郡水東面花山里分徳洞にて生まれる
- 1934.12.30 母と日本へ渡る
- 1944.3 東京都渋谷区立臨川小学校卒業
- 1944.4 東京都立多摩中学校入学
- 1945.5 宮城県立佐沼中学校へ転校

- 1946.6 東京都立青山中学校へ転校（戦後多摩中、十五中合併により青山中となる）
- 1948.3 同中学四年修了
- 1948.4 東京都立青山高等学校二年に編入（学制改革による）
- 1950.3 同校卒業
- 1950.4 早稲田大学第一文学部史学科入学
- 1950.10 早稲田大学第一文学部史学科 学生運動により除籍
- 1951.4 早稲田大学第一文学部史学科再入学
- 1955.3 同大学同学部卒業
- 1955.4 早稲田大学大学院商学研究科経済史専修修士課程入学
- 1960.3 早稲田大学大学院商学研究科修士課程修了
- 1960.4 明治大学大学院文学研究科史学専攻東洋史専修博士課程入学
- 1963.3 同大学博士課程単位修得満期退学
- 1989.4 一橋大学社会学部教授
- 1992.11 文化センター・アリラン館長（現在に至る）
- 1995.3 一橋大学定年退職
- 1995.4 滋賀県立大学人間文化学部教授
- 2002.3 滋賀県立大学定年退職
- 2005.11 在日韓人歴史資料館館長（現在に至る）

### ①お父上のことなど

父・姜永元（1912-1961）は16歳で結婚し、私がお腹にいるときに母を置いて渡日した。最初は東京までの旅費がなく、京都の向日町で八百屋の丁稚を1年位した。東京に来て、向学心もあり正則夜間中学に入るが学資が続かずやめる。屑屋の買子になり家族を呼び寄せる資金を貯める。それ以後東京に住む。主に渋谷にいた。最初は豊分町、広尾に近い南の方。次に渋谷新橋に移り、戦争が始まると物が出なくなり屑屋が出来なくなった。1942年、渋谷の千駄ヶ谷に移り運送店を始める。運送店は当時疎開が始まったから順調だった。その建物が強制疎開

に合い原宿の隠田に移る。そこが1945年5月の空襲に遭い家は丸焼けになる。妹、弟、祖母（父の母）、叔母（父の妹）一家は埼玉県の桶川にある三菱の大工業団地の朝鮮人労働者宿舎に潜り込む。母親は生まれたばかりの妹ともうひとり小さい子連れて宮城県細倉鉾山の知り合いの料理屋の部屋の一角を借りて住む。そこは朝鮮人労働者の慰安所みたいところで若い女の人がたくさんいた。環境が良くないということで陸前高田、女川と転々とした。

1946年、父がメチルアルコールの後遺症で失明し、送金もできなくなりみんな東京に引き上げた。戦争をはさんで一年半は一定の所に住んでいなかった。

私はその前（空襲の前）に宮城県に疎開していた。父の知り合いが宮城県に居た。

1945年6月、祖母、叔母さん、独身の叔父さんは日本には居られないといって韓国に帰った。最後の船だった。それからは韓国の家族と断絶する。

曾祖父は昌原の人。旧韓末に何らかの理由で土地を失い、祖父の代から咸陽へ移る。私は7代目の直系で、遠い先祖の墓は慶南線の中里の駅の近くにある。金達寿さんと同じ所である。

家族は私の下に弟・妹4人の6人兄弟。戦争が終わった時は14歳、中学2年生だった。私はずっと日本の学校で学ぶことになる。中学3年の時に朝鮮中級学校が出来たが、もう一度中1を繰り返すのはかわいそうだからそのまま行くと父が言った。弟・妹は朝鮮中級学校に行った。年の離れた妹2人は距離が離れていて通学が不便なので、日本の小学校を出た後朝鮮中級学校へ行った。

### ②布施辰治との出会い

〈その一〉1946年8月15日、解放一周を祝っ

て父の所に5.6人集まり祝杯をあげた。集會に参加したのではなく自分たちで飲んでいだ。飲んだのが「アイデアルウイスキー」というウイスキーで、それにメチルアルコールが入っていた。父親はほとんど失明状態になった。他の人も治るまでに苦勞した。父はそれ以後現場の仕事は出来なくなった。

1947年、ウイスキーを作った人間を告訴した。その時の弁護人が布施辰治である。目の不自由な父を伴って布施辰治の家を訪ねた。井の頭線永福町の先の浜田山。そこは当時畑ばかりで、父とともに畑の中の道を歩いて布施の家を探して行った。

裁判をしたと思うがその結果は知らない。被害を受けたみんなで告訴したと思うが一番重いのは父だったので、父が中心になったと思う。

なぜ布施辰治を知っていたか。

父の友人の張祥重<sup>1</sup>という人物が家の近くに住んでいた。張祥重さんが布施辰治のことをよく知っていた。布施辰治や朴烈の話をよくして

いた。その人はわたしの学校の保証人でもあった。張祥重さんは大きな声でキャンキャンしゃべるので양철영감(ヤンチョルヨムガン・葉佐おじさん)と言っていた。

張祥重さんは父の死後、半年ぐらいで亡くなった。最後に東大病院に入院している時見舞いに行った。当時私は関東大震災のことを調べていたので、張さんに埼玉の高麗村に行ってその住職に話を聞いてみよと言われた。亡くなった後にその教えを実行した。そこでたくさん殺されたと聞いていたがそれは事実ではなかった。(高麗神社は朝鮮支配のために朝鮮に赴任する高官が参拝したりした。高麗寺には朝鮮人の無縁墓地がある。)

父は石巻、女川に知り合いが多く、私は石巻の近くの佐沼中学校にいたことがあり、女川にもいたことがある。布施辰治は石巻の蛇田の出身なので石巻等のことが話題になった。「よく来た、がんばれよ」ということで頭をなでられたりした。

<sup>1</sup> (1) 布施辰治、張祥重、鄭泰成共著『運命の勝利者朴烈』(世紀書房1946年)に共著者として名前が出ている。「共著者のことば」によると、布施辰治がこの本の執筆を要請したのは張祥重と鄭泰成であり、内容はすべて布施が執筆をした。しかし「日鮮(ママ)同志の友情」のために共著者の署名を要求されたので、それを心から甘受した、と記されている。

(2) 姜徳相「私の体験した早大十月斗争」『早稲田一九五〇年史料と証言・五号』1999年には「保証人で身元引受人の張祥重(朴烈事件の連累者)さんが迎えにきてくれて家に帰ったが、母にはきつくと叱られ、父にはよくやったとほめられ、まごついたがしばらく蟄居していた」と記されている。

(3) 日本アナキズム運動人名事典編集委員会『日本アナキズム運動人名事典』ぱる出版(2004年)では以下のように記されている。

張祥重(チャンサンジュン)1901-1961.7頃 別名・讚寿 朝鮮慶尚南道出身。1920年11月頃から親日派制裁を旨とする朴烈の鉄血団などで活動、体格がよく、痛快なる鉄拳の持ち主として親日派を戦慄させた。23年4月に組織された不逞社のメンバーとしても活動、

同年8月末大杉栄の呼びかけで東京根津で開かれたアナキスト同盟の集りに金重漢らと列席する。9月関東大震災直後に治安警察法違反として検挙され、25年6月予審免訴となる。在東京朝鮮人団体が連合して25年9月24日に開催した痛災震災当時被虐殺同胞には黒友会として参加、騒擾行為で一時検挙される。朴烈事件が終結した26年春頃からは、朴の遺志を継承すべく戦線の立て直しをはかり、元心昌、李弘根らの黒友会メンバーとともに日本人の団体である黒連に加入、同年3月黒連の応援のもとに朝鮮問題講演会を開催、東京雑司ヶ谷に黒色運動社の看板を掲げ活動した。機関紙は『黒友』および『小作争議』と題するパンフレットを発行する。翌27年2月には朝鮮自由労働者組合を組織、崔洛鍾らが朝鮮東興労働同盟を組織した際には、宣伝隊の一員となり朝鮮労働者の飯場を巡訪し、『黒友』を改題した『自由社会』を配布した。31年5月個人的にアナキズムの宣伝紙『自由論戦』を発行、翌32年11月には在日朝鮮無産者居住獲得同盟を組織して朝鮮語の檄文を作成、広く同志に配布した。しかしその後は運動から離れ、38年頃には雇人20余人を使用する古物商を営んだ。(堀内稔)

〈その二〉1951年3月7日東京朝鮮中高級学校事件<sup>1)</sup>に関わって。

父と李景煥さんたちがこの事件で捕まった。公務執行妨害等であろう。父は起訴されたので父と一緒に布施辰治のところに行った。李景煥さんは行っていない。父は有罪になったかどうかはわからない。刑務所に行ったかどうかもわからない。父は視覚障害者だからならなかったかもしれない。ただ騒ぎになったのは事実である。

李景煥さんは父と同様に渋谷豊分時代に隣りに住んでいた屑屋仲間であり、その後長野県辰野に疎開していた。カイゼル髭を生やした面白いおじさんだった。帰国船第1船で北に帰国したと思う。

当時息子が朝鮮中高級学校に在学中であり、長野から出て来てうちの家に泊まっていた。父親と一緒に学校の様子を見に行っただと思う。

以上二回布施辰治に会ったことがある。二回とも同じところかどうかは記憶がない。主に父が話をして、自分は宮城県の話が出たときにそこに居たことを話した程度である。

張祥重さん、李景煥さんはともに父の屑屋仲間であって父より10歳くらい年長の人である。

### ③弟・姜徳勲氏（故人）のこと

事件当時、弟は東京朝鮮中高級学校に在学中であった。怪我したかどうかは知らない。

弟は日本社会に対する批判は強かった。権力、

<sup>1)</sup> 東京朝鮮中高級学校事件と李景煥氏について。

(1) 『警視庁史』によると

(編集発行 警視庁史編さん委員会『警視庁史 昭和編(上)』(部内用) 1988年521頁)

(一) 事件の発端

昭和26年2月23日、蒲田警察署において、連合国占領軍の占領目的阻害文書を所持する都立朝鮮人中・高級学校の生徒一人を検挙し、取り調べた結果、同校内に於いて、占領目的阻害文書である「新朝鮮」「前進」「朝鮮女性」等を印刷していることが判明した。このため、警視庁は、2月28日午前7時、同校の捜索を実施し、多数の印刷物を押収した。ところが、翌3月1日は朝鮮独立運動記念日であったことから、同校生徒らは、これと関連させ、捜索の不当を叫んで王子署に300人、板橋署に400人、赤羽署に40人がそれぞれ押し掛けて抗議した。

その後、日本共産党、旧朝連系幹部、同校のPTA・学校職員等が警察を糾弾するとして、3月7日、同校において「真相発表大会」を開催することを決め、尹徳昆PTA連合会会長名で、日本共産党、民戦、全学連をはじめ関係朝鮮人に参加を呼び掛け、大会終了後関係当局に対して抗議デモをかける計画を進めていた。王子署では、主催者に対し、大会中止を勧告したが応じなかった。

(二) 事件の概要

3月7日、会場に当てられた同校付近には、早朝から学生がピケを張り、付近にアジビラを散布し、また王子職業安定所に集まっていた日雇労働者に対しても、大会参加を呼び掛け、午前9時ごろから参加者が

続々集合し始めた。このため、武田王子署長は、これを見届集会と認め、午前10時、自署員及び隣接各署からの応援警戒員約400名をもって、学校周辺道路の交通を遮断し、同校生徒以外の校内立入りを阻止した。これに対し、青年行動隊員を主とする学生や参集した群衆約800人が不当弾圧であると、阻止線を突破して入場し、午前11時ごろには校内の総数は2000人になった。

校内では、日本共産党風早八十二代議士、加藤充代議士、堀江邑一都教育委員(日本共産党員)らの応援を得て、午前10時ごろから午後1時ごろまで大会を開き氣勢を揚げた。一方、場外においては、青年行動隊員、学生、青年らがスクラムを組んで怒号しながら、警察部隊に石、かわら、唐辛子粉等を投げ付けるなどの集団暴力行動に出た。

午前11時20分ごろ、こうした違法行為の採証のため、捜査第二課員が付近民家の二階から現場写真を撮影したところ、これを見た同校高校生ら十数人が無断で同家の二階に乱入して同課員らを襲い、殴る蹴るの暴行を加えたうえ、カメラ及び閃光器を奪取して破壊し、これを窓から戸外に投げ捨てた。この状況を現認した蔵前警察署K捜査部長らが、これら不法行為者を逮捕し、捜査第二課員を救援しようとしたところ、同家前に群がっていた群衆が包囲し「殺してしまえ」「けん銃を奪え」とわめきながら殴る蹴るの暴行を加え、同捜査部長ほか一人の顔面その他に重傷を負わせたうえ、同捜査部長のけん銃、警察手帳、警棒、手錠を奪取した。

この報告を受けた警視庁は、午後零時10分ごろ第四

警官は犬のように嫌いだ。東京芸大の音楽科を出た音楽家、ソリストだったが日本では仕事がない。所帯を持っていたし帰国したら仕事があると考えて、配偶者と生まれたばかりの娘をつれて61年8月、32船で帰国した。人民俳優という称号を貰い評価されていた。1996年か7年に日本に来て一月半くらい滞在した。今生きていたら79歳位。

#### ④戦後の日本とその中で生きて来て思うこと

日本は戦後民主主義というのが朝鮮人政策を見れば民主主義とはいえない。することはめっちゃくちゃである。私は（学生に）日本の恥部を知りたければまず在日政策をやれ、と言う。

方面予備隊を、次いで第一・第三・第六方面の各予備隊を急派し、手柴第五方面本部長の指揮下に入れて態勢を整えたうえ、群衆に解散するよう警告した。しかし、群衆は、これに應ぜず、青年行動隊員、学生らは、校門を抵抗線として警察部隊の校内侵入をあくまで阻止する構えに出て、労働歌を高唱して氣勢を揚げた。手柴本部長は、部隊に対し実力で解散させるように指令し、全部隊は、いっせいに校内に侵入を開始したところ、コンクリート塀の上から煉瓦、碎石、唐辛子粉等を投げ付ける強硬な抵抗を受けたが、これを排して校庭に入り、午後2時50分ごろまでに学生、群衆全員を校外に押し出して解散させた。

この事件で、警察官28人が重軽傷を負った。また、事件の首謀者李景煥（54）ほか9人を現場で、3人を事後に、いずれも公務執行妨害、暴力行為等処罰ニ関スル法律違反及び傷害罪で検挙し、うち6人が起訴された。昭和32年1月18日、東京地方裁判所は、3人に懲役8月執行猶予3年、2人に無罪の判決を言い渡した（1人は保釈中逃亡）。有罪被告は、これを不服として控訴したが棄却され、更に上告したが棄却となった。また、無罪の2人は検察側が控訴、懲役1年執行猶予3年の判決を受けて上告したが、昭和34年3月19日棄却となった。

(2) 東京都立朝鮮人学校PTA「朝鮮人学校弾圧事件の真相を訴う」によると

(朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成戦後編』第7巻 不二出版2000年 201頁)

(前略) 校長はじめ職員は必死に指揮者に退去を要求した。すると「ピストルをなくしたから捜査する」

在日朝鮮人は、日本の悪さを一番よく知っている存在である。在特会等。

一般の日本人は（朝鮮人政策を）知らないし、関心がない。関心をもたないようにしたのはだれか、と言う問題がある。日本がアジアと仲良くするためにはそこを克服しなければならない。日本は戦争でアジアに負けたという認識がない。中国に負けたという認識がない。朝鮮にも負けたと私は思う。このことを理解せよという反発するしね。日本人は大変な病気を持っている。こんなことは誰にでも言える事ではないが（関心をもっている人だから言う）。

私が一番辛かったのは1950年代～60年代半ばまで。条件さえ許せば外国に脱出したかった。実際そうした友人もいる。

といい28日以上のお執務で校長の机の中から溝の中まで学校の隅々をかき回し、教職員全員の身体検査までおこなった。殴られなかった生徒はなく、打撲傷を負ったもの200名を超え8名（全員中学生）は重傷で入院した。検束された生徒は高校生5名、中学生1名。検束された保護者の数と留置先は教えてくれない。そのうちの一人李景煥氏は60近い老躯で長野から寄宿舎にいる息子を心配して来てこの光景に接し、憤激のあまり警官隊に向かってその非を訴えているとこん棒で乱打され意識不明のまま検束された。

(3) 読売新聞1951.3.8朝刊 八十名が重軽傷 / 王子朝鮮人校 / 戦後最大の警官動員

七日朝十時頃北区上十条二の二二都立朝鮮人中学、高校に集まってさる廿八日の反米ビラ押収抗議大会を開いた約二千名の朝鮮人は王子署の無届集会禁止命令をきかず不穏の空気が濃くなったので警視庁では隣接廿署と予備隊十個中隊千五百名という戦後最大の警官隊を動員もみ合い、昨秋の早大事件以来の大騒ぎとなった末、長野県上伊奈郡辰野町大字辰野アメ商李景煥（五六）ら十一名を公務執行妨害などで検挙、午後二時過ぎ解散させたが、警官側にも蔵前署の小泉巡查部長らが袋だたきにあいピストル、警棒などを奪われたほか重傷十一名、軽傷十一名を出し、また取材活動に従っていた日本ニュースのカメラマン松本久弥（三四）氏は頭部に負傷、毎日新聞写真班員はカメラを壊された。朝鮮側も同高校長の王子署への報告によると五十六名が重軽傷を負った。

私は外国人登録法違反で前科3犯である。登録証不携帯はわかっていて捕まえる。弟が帰国した頃の夏、銭湯に行き出てきたところの屋台でいっぱいやっていたら、顔見知りの原宿署の警官が来て「いいところで会った、お前持っているか」という。持っていないとそのまま原宿署へ連れて行かれる。持っていない理由など聞かないで「弟から手紙来るか」と言う。こんなことが3回あった。不携帯で前科3犯である。朝鮮人は60万人いるが45万人は犯罪者だという統計がある。

健康保険に入ったのは1982年。ベトナム難民のおかげである。無年金の人も多い。沖縄復帰の後、それまで沖縄の人は年金がなかったが彼らには下駄をはかせているが朝鮮人にはしない。そういう差別が公然と通っている。同じように税金は払っているのに。地方参政権は当然あるべきだ。

自分たちにも国が二つに分かれているという問題はある。アメリカの手先になり、ソ連の手先になり、という馬鹿にされる内因を作ってきたけれど、これは自分たちが反省することであり日本が言うことではない。

日本の官僚体制は、戦後も何の変化もない。長官は飛ばされるけれど次官がそのあとに座る。朝鮮や満州帰りの植民地官僚が要所を占める。それが集中しているのが入管である。入管は戦後の特高であるといえる。日本の支配体制は天皇制が無くならないのと同じように何も変わっていない。軍隊は無くなったけれど5年後には復活している。日本を日本人自身がもう少し直視することが必要だと思うが直視しませんね。曲がりくねったうぬぼれ鏡で見るから駄目ですね。

⑤朝鮮戦争の時、民戦などの活動をしたか、という問いに対して  
そのような活動はしていない。

自分自身は皇国臣民化されていた。そういう子どもだった。親父が受けた差別を見ているとそれから脱け出すにはどうしたらいいかと考える。天皇に近づくのが一番いいと子ども心に分かる。軍人になりたい、それも兵隊ではなく将校になり天皇に近づきたいと。自分の勉強はそれ一心だった。解放後自分が信じたものが崩れて自分はどこに行ったらよいか迷った。親父たちはそばに民族があるからそこに戻る。自分は言葉も風習も知らない。日本人の作法に従っていたから母親の習慣を軽蔑していた。朝鮮人の食べ方とか食事の作り方とかを軽蔑していた。日本人の目で見ている朝鮮人が嫌でたまらなかった。それを捨てていき、本当の意味で自分が民族を回復するには随分時間がかかった。中学・高校時代は民族虚無主義者と言っていた。自分は何者か、と。そういう状態から脱して自分が朝鮮人だと宣言し、みんなにも名前を言ったのは朝鮮戦争後だった。大学に入ってから。

それまではみんなが活発に活動しているのを見て関心がなかったわけではなかったが、そこに入る勇気がなかった。そういう中で歴史にたどり着く。民族性回復の為には歴史認識を正さなければならぬ。やればやるほど日本人の歴史認識はおかしいということになるし、自分の民族性も強くなった。実際に自分が朝鮮人だと宣言したのは24歳くらいだと思う。それまでもそれとなくまわりは知っていたけれど。学部を出て大学院に入った時。それまでは中国史を勉強していたけれどこれでは駄目だ、自分は朝鮮史をやるぞと宣言した時。

## ⑥山辺健太郎氏<sup>iii</sup>との出会い

山辺健太郎氏を知ったのは卒論を準備し始める頃。大学3年か4年の時。私は代々木に住んでいたが近くに代々木病院があった。そこに郭さん、李さん、金さんという3人の看護婦がいた。僕より少しお姉さんで家によく遊びに来て

いた。その人たちが、僕が歴史を勉強しているのを知り、うちの病院の寮に歴史をやっている面白い人が居るといので、アポイントをとって会いに行ったのが最初である。

そのとき山辺さんが、お前は朝鮮人なのになぜ中国史をやるのか、朝鮮史は日本の歪みを正す鏡だ、そういう気持ちで朝鮮史をやれ、そういうものが発見出来たら、本当に日本と朝鮮との橋渡しができる、そういう人間になれる、といわれた。それが大きな刺激になり、準備していた卒論はやめられないので中国史をやり、いろんな事情で大学院に行くことになったので院では朝鮮史をやる、と宣言した。

中国史をやっていた人たちの中で何人かが朝鮮史が大事だということになり、宮田節子さんはその中の仲間であるが、権寧旭、大村益夫さんら5.6人の仲間と朝鮮史研究のグループを作った。おそらく戦後の日本で朝鮮史研究のグループが出来たのは早稲田の中国史研究会の5.6人が最初だと思う。

山辺さんの部屋は狭い部屋でゴミだらけだった。ゴミの中で暮らしているような状態。

## ⑦私の先生と言える人

まず山辺健太郎先生。次に友邦協会<sup>iv</sup>の理事長だった穂積真六郎先生、近藤銀一先生、皆朝鮮体験者。友邦協会の研究会で、資料はどこにあるかとか昔の朝鮮について等議論をする。議論が一致するわけではないがそこで学んだことが大きかった。10年間位週に一回そこで学んだ。宮田節子、権寧旭、梶村秀樹はその仲間。当時日本の大学で朝鮮史をやっているゼミはなかった。都立大学に旗田巍の高麗史ゼミはあったが。それで東大や早稲田や明治、慶応等で朝鮮史をやりたい人は丸の内にある友邦協会に来ていた。

当時電車の中で朝鮮語の新聞を読んでいる人を見ると怖くて近づかなかった。警察か防衛庁の人に決まっていた。天理大も最初は朝鮮支配のための朝鮮研究であった。

## むすびに代えて

二度目の布施辰治宅訪問の理由はお父上姜永元氏が東京朝鮮中高級学校事件で起訴され、その弁護を依頼するためであることがわかった。首謀者と見なされた友人の李景煥氏ほか、現場

<sup>iii</sup> (1) 姜徳相「山辺さんのこと」『山辺健太郎・回想と遺文』(みすず書房1980年)では、山辺との出会い・思い出とともに山辺の朝鮮研究の限界にも触れられている。

(2) 以下『日本大百科全書(ニッポニカ)』小学館による。

山辺健太郎(1905-1977)労働運動家。朝鮮近代史、社会主義運動史研究家。東京市本郷区台町に生まれる。1921年大阪で初のメーデーに参加、労働運動に従事、四・一六事件で検挙されたが33年暮れ非転向で出獄。41年日米開戦で検挙、非転向のため予防拘禁所入りし獄中細胞に参加。45年10月10日治安維持法廃止で出獄、戦後の日本共産党で書記局員、統制委員となる。党史委員にもなり、日本共産党史、社会主義運動史、朝鮮近代史研究に入り、58年の第7回大会後は日本社会運動史や朝鮮近代史の執筆に専念した。自伝に『社会主義運動半生記』(岩波新書)、編著書に『現代史資料 社会主義運動1〜7』(犬丸義一)

<sup>iv</sup> 友邦協会については協会の刊行書冒頭に「財団法人友邦協会の事業」として以下の記述がある。

「当協会は昭和25年秋、元朝鮮総督府殖産局長故穂積真六郎氏(前理事長)の提唱により、わが国朝鮮統治の史実保存のため、その関係文献資料の調査・収集を目的として設立(昭和27年認可)、同時に、それに附随する「史料研究会」・「朝鮮語講習会」及び「資料編集」等の事業を行なっている。

この種の文献資料は、戦争と引揚げのため散逸、諸般朝鮮問題の研究上、極めて不備の状態にあり、当協会はそれを充足するため、旧朝鮮関係の諸氏に、その経験または解説を講述していただき、そのうち重要なものを、本シリーズにまとめて、必要な向きに提供している。

その趣旨は、わが国朝鮮統治の治績を正しく後世に伝えるとともに、近代における両国の密接不離な歴史的関係の正しい理解、認識を深め、両民族共存共栄の資としたい考えである。」

で9人、事後に3人が逮捕され、そのうち6人が起訴されている。その結果、逃亡したひとりを除き全員が執行猶予つきの有罪となったが、お父上はその中のひとりだったようである。

筆者は「1951年 東京朝鮮人中高級学校事件一戦後の布施辰治と朝鮮人〈その1〉」<sup>v</sup>において、日本映画社カメラマン松本久弥が取材中に警官から暴行を受けた事件をとりあげている。松本の委任を受けた布施辰治は警官を告訴すると同時に、衆参両院の法務委員会で上村進・羽仁五郎らを通して、報道関係者に対する警官の暴行は国民の知る権利を侵すものであると追及した。しかし警官の告訴は実現しなかったので民事訴訟に切り替え、「謝罪状及びこれに附帯する慰謝料請求」という訴状を提出した。これは警察の社会的責任を問うために警視総監の謝罪広告を要求するものであった。

拙稿では、訴状の背景に込められている布施の心情を①「警察官の警棒やピストルを濫用する被害事件が戦前のサーベル時代よりも増加しているのにその責任追及が曖昧にされていること（告訴状）」にみられるように、戦後の新警察制度が戦前と変わらず民衆を弾圧する姿勢であることへの批判、②1948年の1.24文部省通達、4.24阪神教育闘争以来絶えることない日本政府と占領軍による朝鮮人学校蹂躪に対する憤りであると記した。特に②に関してはこの事件において東京朝鮮人中高級学校の生徒と教員も警官の暴行により多数が負傷したが、松本久弥のよ

うにその被害を訴えることが出来ない状況にあることも布施の念頭にあったと考えたが、それだけではないことが今回わかった。

すなわち、当日父兄会を開くという案内<sup>vi</sup>があったので子どもたちの様子も気になって学校に集合したところ、警官隊とぶつかることになり検挙され起訴されたため、布施に弁護を依頼しにやって来た姜永元氏をはじめとする朝鮮人保護者たちの状況も視野に入れたうえでの憤りでもあったのである。

弟・姜徳勲氏が権力や警官をひどく嫌っていたこと、日本社会に対する強い批判をもっていたということは、この当時東京朝鮮中高級学校に在学中であり、思春期に権力による弾圧を度々経験したことがその思想形成に影響しているのではないだろうか。

この事件より20年以上前ではあるがこんな新聞記事<sup>vii</sup>がある。1927年10月に朝鮮共産党事件の弁護で京城に滞在中の布施を訪ね、朴烈の甥である14歳の朴炯來君<sup>viii</sup>が慶尚北道尚州から一人でやって来た。叔父朴烈の弁護<sup>ix</sup>の礼を言うためである。新聞には「布施氏は満面に喜色を浮かべその可憐な少年を迎え、頭を撫でて可愛がり、冷たい法廷内に春風が吹くような人情劇が演じられた。しかし少年を尾行した鐘路警察署の刑事の目は鋭く光っていた」と記されている。

これは全くの想像でしかないのだが、目の不

<sup>v</sup> 『在日朝鮮人史研究』第42号 2012.10

<sup>vi</sup> 1951年3月5日付で東京都立朝鮮人中等学校PTA会長尹徳昆名の「学父兄臨時総会開催に関して」という案内状が出されている。内容は、2月28日学生の反戦ビラ所持嫌疑により武装警官500余名が学校を搜索したので、これへの対策と学校を守るための臨時総会を3月7日10時から学校で開催する、として学父兄・卒業生の出席を呼びかけている。この総会は警察から中止を求められていたにも拘らず開催したので「無届集会」とされて戦後最大の（読売新聞）警官導入となった。

<sup>vii</sup> 『東亜日報』1927.10.15

朴烈親姪上京 / 布施氏를 訪問致謝 / 쓸쓸한 법정에 열린 인정극 / 十四歲少年에도 尾行

<sup>viii</sup> 朴炯來は朴烈（朴準植）の兄・朴庭植の長男。1926年7月、金子文子が獄中で死亡したとの知らせを受け、父の朴庭植に伴われて東京に来ている。その後も布施辰治宛に6点の書簡を送っており、自分の進路について相談したりしている（石巻文化センター『布施辰治関係資料収蔵品目録Ⅱ』103頁）。

<sup>ix</sup> 1926年2～3月大審院での朴烈・金子文子「大逆事件」公判で布施が弁護を行った。



自由な父上を案内して訪ねて来た姜徳相少年に対し、自分の故郷である石巻の話などをして励ましたという布施のまなざしは、この時の朴炯來君へのまなざしと相通じるものがあったので

はなかっただろうか。

布施辰治は若い人々と故郷・石巻をこよなく愛する人<sup>\*</sup>であったので、そのように思えてならないのである。

---

<sup>\*</sup> 朝鮮戦争反対のピラを撒いて政令325号違反で捕まりハンスト中の辛昌錫を、ニコヨン広場で警官隊と衝突し捕まった高史明（キン・テン）を布施は救出する。このような若者救出のため献身する姿に、大石進は三男社生を救出できなかった贖罪意識を感じると記して

いる（大石進『弁護士布施辰治』西田書房2010年196頁）。また「郷里の青年たちへの教育奨励・援助」（森正『評伝布施辰治』日本評論社2014年73頁）など、布施の故郷に対する誇りと愛慕を示す資料は多い。